

【鼎談】

道徳の時間は、対話の時間

光村図書道徳教科書『きみが いちばん ひかるとき』の編集委員である杉中康平先生を司会に、小学校からは尾崎正美先生、中学校からは荻原忍先生をお招きし、道徳科における「対話的な学び」について、語り合っていました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、大阪、岡山、長野、東京（編集部）をオンラインで結んでの鼎談となりました。

杉中康平 ●すぎなか こうへい
四天王寺大学 教授

尾崎正美 ●おざき まさみ
岡山県瀬戸内市立国府小学校 教諭

荻原 忍 ●おぎはら しのぶ
長野県佐久市立中込中学校 教諭

道徳の学びと対話

杉中 今日は、道徳科における「対話的な学び」について、先生方と考えていきたいと思います。対話には、大きく四つのものがありますね。「教材との対話」「授業者との対話」「子どもどうしの対話」、そして、「自己内対話」です。道徳科では、こうした対話を通して、自分の生き方を深く考えていくことになるのだらうと思います。

まず、あえて、先生方に問いたいのですが、なぜ、道徳科の学びにとって、対話が大切なものであり、必要なものなのでしょうか。

荻原 私は、対話という営みは、自分を「客観視」するプロセスとして大切なものだと考えています。日常的に、「これって大事だよな」とか、「これでいいんだよな」と思っていることを、対話の中で「どうして」と問われると、改めて自分が大事にしてきたことを、「なんでだろう」と考える。それが、自分の考えや経

験を客観化して見るということにつながるのだと思います。つまり、自分との対話、友達との対話を通して、自分の経験を子ども自身が価値付けたり、他の経験と関連付けたりして考えることができる。その点で、対話は、道徳科での学びを深めるための大切な鍵になると思います。

尾崎 確かに、荻原先生のいう客観視ということはとても大事ですよね。

私は、対話を通して、「違い」に気づかせることを大切にしています。学校という場所は、同じ年齢の子たち、しかも、たいていは同じ地域に住んでいる子たちが通っていて、ずっと同じような人間関係が続いているような場所です。子どもたちは意外と、自分と周りは「同じ」だと思って生活しているんです。そんな中でも、自分の考えや価値観を話すことによって、自分と相手は違うんだと気づくことができます。いつもいっしょに遊んでいる友達でさえ、自分と違う考えをもっている、人間というのは違う考えがあってあたりま

えなんだという経験を、ちょっとずつ、毎時間積み重ねていくことが大事だと思っています。

そうすることによって、今までの自分の考えはよかったのかなとか、そんないい考えもあるんだななどと、見つめ直すことにつながっていきます。違いがあるというのを実体験していくのが、対話であり、それが自分を見つめることにもなると思います。

対話的な学びを成立させるために

杉中 私たちは、対話というものに、性急に「共感」を求めがちですが、道徳科における対話的な学びにおいては、まずは、自己を「客観視」することや、他者との「違い」に気づく経験を丁寧に積み重ねていくということが鍵になりそうですね。

とはいえ、実際の授業では、子どもが本音を語りたがらない、なかなか話が盛り上がらないと、悩まれている先生も多いと思います。道徳科の授業で、対話的な学びを成立させるための前提や条件、対話を進めていくうえで大切にしていることを、聞かせてください。

荻原 対話が、学習活動として意図的に取り入れられ始めた頃、自分の中で葛藤がありました。感じたことや思ったことを自由に話し合ってごらんという授業、つまり、子どもに主導権を与える授業をたくさん拝見しました。しかし、多くは盛り上が

るけれど、深まらないんですよね。自分でも、いろいろ悩みながら実践を重ねてきましたが、今は、教師側が、何を子どもたちに考えさせたいかという明確な指導観を前提としてもつ必要がある、と考えています。

尾崎 私は、対話の学びが成立する条件として、まず対話が成立する「土壌」というものを重視しています。特に、小学校では、学級経営、あるいは、道徳科以外の時間に、どのように過ごしているのかが、大事だと思います。つまり、それは、「学級の中で多様な考えがあることを認め合っているか」ということです。「どの子もみんな違っていいんだ」「何を言ってもいいんだ、思ったことを素直に出していいんだ」「誰か絶対、助けてくれるんだ」という信頼感、そういうものがないと、本音は出せないと思います。

そういう「土壌」があったうえで、荻原先生が言われたように、思わず考えを語りたくなるような問いや、他の人の考えを聞いてみたくなるような問いを、教師が明確な指導観をもって設定することが、大切だと思います。なんとなく、何をしたのかなと思ってしまう授業って、単に教材を学ぼうとしている、つまり、教材の理解にとどまっているものが多いと思います。何に目を向けて、どういうふうに生き方を考えさせたいのかというところを明確にしていることが、必要だと思います。

それから、私は、「わからない」



道徳科の授業は、「生き方」を問うているわけだから、本来、間違いも正解もない。立ち止まることもある。（杉中先生）



杉中康平●すぎなか こうへい
四天王寺大学教授（道徳教育学、教育実践学）。主な著書に、『楽しく豊かな道徳科の授業をつくる』『楽しく豊かな道徳科の授業をつくる 2』（編者）（ミネルヴァ書房）、『中学校「動き」のある道徳科授業のつくり方』（共著）（東洋館出版社）などがある。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。

と言えることを、大事にしています。道徳では、答えがわからなくなって、立ち止まって迷ってもいい。何か答えがないと対話ができないというわけではなくて、自分の状態が言えたら、わかっているのか、わかっているのかが言えたら、そこから対話が始まる、と考えています。

杉中 道徳科の授業は、「生き方」を問うているわけだから、本来、間違いも正解もないんですよね。立ち止まることもある。一見とんちんかんに思えるような意見だって、それが鍵を握って、子どもどうしの対話が深まることがあるじゃないですか。尾崎先生のおっしゃる土壤、お互いが違いを含めて認め合えるような、失敗が許されるような場というのが、道徳科の授業を行ううえでの大前提といえますね。

子どもどうしの対話を促す工夫

杉中 昨今、授業者と子どもとの対話を念頭に置いた授業論が多いように感じますが、本来大切なのは、子どもどうしの対話をもっと促進していくことです。その点で、工夫していること、気をつけていることはありますか。

尾崎 私も、子どもどうしの対話こそが、大事だと思っています。私は、授業では、あまりしゃべりません。そして、私自身がわかり切っていることを発問しないようにしているんです。自分の中に答えがないからこそ、子どもの発言を、なるほどと思

いながら聞けるんです。もちろん捉えさせたい道徳的価値はありますが、その価値に行き着くまでの道のりは、ひと筋ではないので、いっぱい考え方があっていいかなと思います。

いろいろな考えが出てくると、他の子たちがそれを理解しているかききたくなるので、発表者が言っていることに対して、必ず子どもに反応させるようにしています。うなずいたり、なるほどと言ったり、何でもいいんです。その反応を見て、「今、納得しているみたいだけど、何に納得したの？」ときいて、子どもどうしで理解し合っているかを確認したり、疑問を出していったりします。

杉中 教師が「わかっていることを問うこと」、つまり、「正解主義」は、子どもどうしの対話を阻害する一つの要因といえますね。尾崎先生のお話を聞いて、先日拝見した小学校の授業実践を思い出しました。

子どもたちが中心発問のときに、1人1枚、A4サイズのホワイトボードを持って、自分の思いや考えを書くんです。書いた後、先生が「交流タイム」と宣言すると、自席を離れて、そのボードを持って、お互いが意見を聞き合います。4、5分です。この交流の後、先生はこういう問いを入れたわけです。「○さん、誰の意見が気になった？」と。あるいは「□さんはどう書いていた？」「△さんも似たようなこと書いていなかった？」と。つまり、先生は、子どもどうしがお互いの意見を意識し合い、

交流し合うのを促進するファシリテーターの役を担っている。これは間違いなく、子どもの対話を促進するような動きですね。まさに今、尾崎先生がおっしゃった、ファシリテーターとしての教師の役割といえますね。荻原先生、中学校ではどうですか。

荻原 私は、グループトークを意識的に取り入れています。ペアでの対話の場合、自分が何を考えているかを明確にして終わることも多いのですが、グループにすると、複数の感じ方や考え方が出てくるので、それを比較検討することで、考えが深まるんです。

中学2年生の教材「嫌われるのを恐れる気持ち」を、2時間扱いにして、ひと手間かけたグループトークを行いました。まず、主人公の気持ちに共感するか、しないかをそれぞれに考えさせます。そして、同じ考えの子を4人程度のグループにして、共感する、あるいは、共感しない理由を話し合わせ、ホワイトボードに書かせます。ただし、ボードに意見を書かせただけで終わってはもったいない。その後、どうすれば対話が生まれるか。私は、そこにポスターセッションふうの活動を取り入れてみたんです。4人グループのうち2人は自分の場所にとどまって、残りの2人は異なる立場のグループの考えを聞きに行く。考えを聞いたら、また自分のグループに戻って、聞き取ったことを同じグループの子に伝える。それを2回、繰り返しました。

1回目のときは、単なる言い合いになってしまったんです。しかし、2回目に回ったときに、「確かにそうだよ」と、自分自身の経験を振り返っている子も出てきて、広がりや深まりが出てきたなと思ったんです。

杉中 まさに、初めに伺った、「違い」や「客観視」という要素を押さえた実践といえますね。尾崎先生、子どもどうしの対話という点では、発達段階から見て、小学校ではなかなか難しい面もあると思いますが、工夫されていることはありますか。

尾崎 私は、「脳内会議」という実践をやっています。あることで葛藤している登場人物の脳の中に、みんなで入って話し合うという設定の活動です。こう、子どもたちに呼びかけるんです。「主人公は、脳の中で、『きっと、これはこうすべきだ』とか、『いや、しないほうがいい』とか相談をするはずだから、それをみんながこの主人公の脳の中に入るとして、話し合ってみよう」と。

この目的は、合意を生む話し合いにすることなんです。子どもから、多様な考えは出るんだけど、それが出ただけで終わることがままあって、ずっと課題に感じていました。出た意見を、これが大事だってわかったよね、と教師がまとめるのではなく、子ども自身が、何が大事かをまとめていくためには、どうしたらよいかと考えました。そこで、「脳内会議」として、「まとまらないと、この主人公は動けないよ」という設定を考えました。私は、4年生の「絵



対話では、「聞く力」こそが大事。相手の発言の背景を想像できる子どもを育てたい。（荻原先生）



荻原 忍●おぎはら しんのぶ
長野県佐久市立中込中学校教諭。公立小学校、特別支援学校に勤務の後、信州大学教育学部附属松本中学校を経て現職。専門は、特別支援教育、数学科。



世界規模の問題も 対話が解決への第一歩になる。 対話の力を、日々の授業で 体感してもらいたい。

(尾崎先生)



尾崎正美 ●おぎ き まさみ

岡山県瀬戸内市立国府小学校教諭。公立小学校、岡山大学教育学部附属小学校教諭を経て現職。光村図書小学校『道徳』教科書編集委員。



はがきと切手」, 5年生の「ブランコ乗りとピエロ」, 6年生の「手品師」などで実践しました。主人公が葛藤し、道徳的によりよい行動をとった結末になっている教材であれば効果的だと思います。

対話のもつ力

杉中 ポスターセッションも「脳内会議」も、意見や考えの出し合いで終わるのではなく、ひと工夫加えることで、「対話的な学び」に劇的に変わることを示してくれます。さて、最後に、今回のテーマについて、改めてお考えになったことを聞かせてください。

荻原 道徳の学びでの対話が、一時的なもので終わるのではなく、地域社会などへ、継続的につながってほしいなと改めて思いました。

そのためには、もちろん自分の考えをもつことが大事ですが、なぜ相手がこのような発言をしたのだろうと、発言の背景とかプロセスまで想像できる子どもに育てていきたいなと思います。つまり、「聞く力」です。自分にも、それぞれいろいろな葛藤があって、現在の自分がいる。今、目の前にいる相手もいろんな経験をして、今ここにいます。それぞれが、それぞれのストーリーを紡ぎながら生きている。こうしたことを共有したうえで、自己理解を深めていける道徳科の授業ができればいいなと思います。そのためにも対話を、大事にしていきたいなと思いました。

尾崎 全くその通りだと思います。これまでは、自分の話したいことを話せるということが、重視されてき

たように思うのですが、対話を考えたときに大事なことは、「聞く力」だと思います。教師って、とかく子どもたちに話させよう、発表させようとしめますけど、そういうとき、発表している子どもしか見ていないんですよね。そうではなくて、聞いている子どもたちに焦点を当てて、自分の授業を見直すことが、これから特に大事だなと思っています。ただ単にほうっと聞くのではなくて、荻原先生が言われたように、相手の思いを理解しようと思って聞く力をつけてやりたいなと思います。

それから、子どもたちには、対話によって成し遂げられることは大きいんだという、「対話のすごさ」というものを、学校にいるうちにしっかり体験してもらいたいなと思っています。対話を試みることで、世界規模の問題でも解決へ向かう一歩がつかれるんだという、対話のもつ力というのを、日々の授業の中で体感して成長していつてもらいたいなと思っています。

杉中 コロナ禍の状況で、私たちは、改めて対話の必要性、つながっていくことの大切さに気づかされました。私は、学校教育を支えているいちばんの根本の力が、対話だと思うんです。そして、その対話の大切さを、子どもたちに伝えていけるのが、まさに、道徳科の時間なのだと思っています。今日、その思いを、いっそう強くしました。

先生方、本日はありがとうございました。次は、直接お会いして語り合えることを楽しみにしています。